

現住地・出身地の生活環境評価と人々の U ターン意向  
Relationship between the U - turn intension and the evaluation of living  
environment in one's place of residence and hometown

○関口 達也\*・林 直樹\*\*・杉野 弘明\*\*\*・寺田 悠希\*\*\*\*

Tatsuya SEKIGUCHI, Naoki HAYASHI, Hiroaki SUGINO, Yuuki TERADA

### 1. はじめに

近年、日本の各地で過疎化が進行し、既に無居住化した地域も散見される。2050年には居住地の約2割が無居住化するとの推定もある<sup>(1)</sup>。

この問題に対し、出身地への移住（以下、「Uターン」）の促進は重要な対策といえる。先行研究でもUターンをする人々の特徴（山口ほか(2010)<sup>(2)</sup>）や、Uターンの動機（小林(2002)<sup>(3)</sup>）などが分析されている。さらに、地域環境・資源とUターン意向との関係を分析した研究（岡崎ほか(2004)<sup>(4)</sup>）もある。そこでは、家業継承や親の世話などが個人のUターン動機になりやすいこと、地域の利便性などの生活環境もUターン意向に影響を与えることが示されている。特に地域の生活環境整備は、人々のUターン意向を効率的に高めることが可能といえよう。

一方で、これらの研究は特定地域を対象とするため事例の個別性が強い。また、人々は出身地と現住地の環境比較からUターン意向を規定するとも指摘される（小川・深田(1976)<sup>(5)</sup>）が、現住地・出身地の比較に主眼を置いてはいない。

以上を踏まえ、全国的なアンケート調査に基づき、Uターン意向に影響を与える生活環境要素の抽出することを本稿の目的とする。その際に、各自の現住地と出身地の生活環境評価の差異に着目する。

### 2. アンケート調査による人々の帰郷意向の分析

日本全国の18～79歳の男女を対象にアンケートを実施した（2016年1月15～19日実施）。各都道府県からほぼ均等に1056件の回答を得た。分析で使用する主な質問項目は1)回答者の出身地への移住意向（5段階<sup>註1)</sup>、2)現住地・出身地の生活環境項目（20項目、後述）の評価（5段階<sup>註2)</sup>、3)居住地を決める際の各生活環境項目の重視度合い（5段階、2）と同項目）である。表1に回答者の基本的な個人属性をまとめる。まず、生活環境項目に対する人々の評価・意識構造を把握した。具体的には、居住地を決める際の各生活環境項目の重視度合いの回答結果に対して因子分析を適用した。表2に示したように20項目の生活環境項目は、1)地域の物的利便

表 1 : アンケート回答者の基本属性  
Table 1 : Basic attributes of respondents

性別	男性 587 / 女性 469
年齢	20代以下 76 / 30代 181 / 40代 326 / 50代 243 / 60代 185 / 70代以上 45
きょうだい の中での地位	第1子長男 310 / 第2子以降長男 113 / 第1子長女 240 / 第2子以降長女 107 / その他 286
結婚経験	未婚(離死別含む) 332 / 既婚 724
子どもの有無	有り 662 / 無し(死別含む) 382 / 不明 12
居住形態	持家(一戸建て) 698 / 持家(集合住宅) 91 / 借家 236 / その他 31
現住地	大都市 172 / 中都市(大) 224 / 中都市(小) 317 / 小都市 273 / 町村 70
出身地(現住地と異なる 回答者のみ)	大都市 129 / 中都市(大) 78 / 中都市(小) 117 / 小都市 125 / 町村 49 / 不明 13
現住地の居住環境	農・山・漁村 180 / 都市部 228 / 郊外部 597 / その他 11 / 不明 40
出身地の居住環境	農・山・漁村 114 / 都市部 159 / 郊外部 198 / 無居住化地域 5 / その他 7 / 不明 28

\* 中央大学理工学部 Faculty of Science and Engineering, Chuo University

\*\* 東京大学大学院農学生命科学研究科 Graduate School of Agricultural and Life Sciences, The University of Tokyo

\*\*\* 東京大学海洋アライアンス Ocean Alliance, The University of Tokyo

\*\*\*\* 東京大学大学院工学系研究科 Graduate School of Engineering, The University of Tokyo

キーワード：  
U ターン意向、  
多変量解析、  
アンケート、

性・快適性 (赤色のセル), 2)地域と回答者の精神的な繋がり (黄色のセル), 3)回答者自身の家系的な繋がり・義務 (青色のセル), 4)地域の親族・知人からの援助 (緑色のセル) の4因子(意識)に分類することができた。

次に、順序ロジスティック回帰分析により帰郷意向の予測モデルを構築した。従属変数は出身地への移住意向, 説明変数は生活環境20項目に関する現住地の評価と出身地の評価の差分<sup>注3)</sup>とした。変数選択には変数増加法を用いた。結果, 地域への愛着の持ちやすさ, 気候の過ごしやすさ, 家族・親族からのサポートの受けやすさ, 通信インフラの充実性, の4項目が有意な変数として採用された(表3)。いずれも出身地よりも現住地の評価が高いほどUターンには否定的になりやすく, 現住地よりも出身地の評価が高いほどUターンに積極的になりやすいと解釈できる。実際の移住意向の回答とモデルからの予測の一致度合いは, 42.3%であった。

また, 採用された生活環境項目は, 前述の因子のうち3つの因子のそれぞれを構成する要素であった。これは, Uターンのために地域の生活環境を整備する場合, 多面的なアプローチが重要であることを示唆している。

### 3, まとめと今後の課題

以上, 現住地と出身地の評価の差異に着目し, Uターン意向に影響する生活環境項目や, 各項目に対する人々の意識の分析を行った。

今後の課題は, モデルの説明力を高めることである。また, 人々の評価と客観データとの照応を行い, 個人属性や現住地・出身地の状況からの移住意向の予測も可能と考えられる。

#### 謝辞

本研究は, 平成27年度国土政策関係研究支援事業「将来的な再居住化の可能性を残した無居住化に関する基礎的研究: 農村再生に向けて」の助成を受けたものである。

#### 注

- 1) 「5, 移住したい」を最高, 「1, 移住したくない」を最低の評価とする5段階評価である。
- 2) いずれも5を最高評価, 1を最低評価とする。なお, アンケートでは「そもそも当てはまらない」という項目を立てているが, 本稿では積極的評価をしていないとみなし, 「3,

どちらともいえない」の中層評価に含めて扱っている。  
3)間隔尺度とみなして分析を行う。

#### 参考

- 1) 国土審議会政策部会長期展望委員会「「国土の長期展望」中間とりまとめ 概要」, 2013, <http://www.mlit.go.jp/comm/000135837.pdf>, 2016年4月1日閲覧
- 2) 山口泰史, 江崎雄治, 松山薫「新規大卒者のUターン移動と就職」, 季刊地理学, 62号 pp.211-221, 2010
- 3) 小林恒夫「農家青年の離職就農(Uターン)の動機とメカニズムに関する一考察—諸説検討と実証分析—」, 農業経営研究, 40巻2号 pp.1-10, 2002
- 4) 岡崎京子, 後藤春彦, 山崎義人「Uターン者増加の過程における転入要因の変遷—宮崎県西米良村を事例として—」, 都市計画論文集, 39巻3号 pp.25-30, 2004
- 5) 小川一夫, 深田博己「過疎地域青年のUターン行動の実証的研究」, 実験社会心理学研究 16巻2号 pp.110-120, 1976

表2: 生活環境項目の分類

Table2: Classification of living environment

	因子1	因子2	因子3	因子4
日常的買い物環境の充実性	0.843	-0.108	-0.068	-0.008
交通環境の充実性	0.797	-0.075	-0.051	-0.035
通信(インターネット, 携帯電話)インフラの充実性	0.792	-0.038	0.029	-0.099
自然災害発生の危険の少なさ	0.726	0.011	-0.050	0.044
気候の過ごしやすさ	0.719	0.074	-0.063	-0.049
医療・介護・福祉環境の充実性	0.688	0.039	-0.030	0.091
住居の確保のしやすさ	0.672	-0.007	0.165	-0.064
仕事環境(雇用機会・家業含む)の充実性	0.626	-0.066	0.141	-0.007
迷惑施設(ごみ・下水処理場や公序良俗に反する施設)の少なさ	0.555	0.038	-0.001	0.136
緑地環境・自然的景観の充実性	0.489	0.350	-0.020	-0.037
地域の行事・祭りなどのイベントの充実性	-0.047	0.887	-0.044	-0.039
地域コミュニティへの参加のしやすさ	-0.048	0.858	-0.043	0.050
地域への愛着の持ちやすさ	0.092	0.649	-0.059	0.221
日常的に参拝できる神社・お寺などの充実性	-0.033	0.613	0.180	-0.144
相続済みもしくは相続すべき土地や家屋の管理のしやすさ	0.054	0.062	0.852	-0.069
自分から親への生活サポートのしやすさ	0.033	-0.148	0.695	0.243
墓参りのしやすさ	-0.126	0.308	0.515	-0.054
家族・親族(親, 兄弟姉妹, 子どもなど)から自分への生活サポートの受けやすさ	-0.030	-0.028	0.061	0.928
家族・親族以外(友人・知人など)から自分への生活サポートの受けやすさ	-0.025	0.088	0.018	0.813
子育て環境の充実性	0.208	0.248	0.108	0.152

因子寄与率: 56.5%, RMESA: 0.0767

項目間の共通性は最小の0.290

各項目の回答結果には天井効果・床効果は確認されず

表3: 順序ロジスティック回帰分析の結果  
Table3: The result of ordered logistic regression

	B	標準誤差	Wald	自由度	有意確率	95%信頼区間		
						下限	上限	
しきい値	[移住意向高=1(移住したい)]	-1.398	0.12	135.511	1	0	-1.634	-1.163
	[移住意向=2(どちらかといふと移住したくない)]	-0.38	0.103	13.689	1	0	-0.581	-0.179
	[移住意向=3(どちらともいえない)]	1.619	0.127	161.828	1	0	1.369	1.868
	[移住意向=4(どちらかといえば移住したい)]	3.039	0.189	258.671	1	0	2.669	3.409
位置	地域への愛着の持ちやすさ	-0.517	0.078	44.078	1	0	-0.67	-0.365
	気候の過ごしやすさ	-0.273	0.067	16.432	1	0	-0.405	-0.141
	家族・親族から自分へのサポートの受けやすさ	-0.295	0.069	18.506	1	0	-0.43	-0.161
	通信インフラの充実性	-0.234	0.072	10.657	1	0.001	-0.374	-0.093

モデル適合性: 適合(帰無仮説 $H_0$ : 観測された度数分布と予測された度数分布が同じ, のもとで有意確率0.642)

Nagelkerke の疑似 $R^2$ : 0.278

平行線の仮定: 満たす(帰無仮説 $H_0$ : 全ての回帰式を通じて, 説明変数の辺回帰係数が等しい, のもとで有意確率0.325)